# 三鷹市美術ギャラリー　収蔵作品展 Ⅳ

## 前期：2023年6月3日(土) ～ 7月9日(日)

会場：三鷹市美術ギャラリー　主催：三鷹市美術ギャラリー・（公財）三鷹市スポーツと文化財団

### 出品リスト

＊「森秀貴・京子コレクション」

| 作品番号 | 作家名 | 作品名 | イメージ寸法（縦×横） | 制作年 | 技法／材質 | エディション | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 59 | 高山良策 | 少女B（東宝時代のニューフェイス） | 452×378mm | 1948年 | 油彩／カンヴァス | | |
| 60 | 高山良策 | （不明） | 652×910mm | 1951年 | 油彩／カンヴァス | | |
| 61 | 高山良策 | （不明） | 505×606mm | 1959年頃 | 油彩／カンヴァス | | |
| 62 | 高山良策 | オネストジョン | 1125×1630mm | 1967年 | 油彩、壁紙、石膏、ドンゴロス他／板 | | |
| 63 | 高山良策 | 我がロード | 606×727mm | 1976年 | 油彩／カンヴァス | | |
| 64 | 辰野登恵子 | May-7-91 | 1915×1300mm | 1991年 | リトグラフ／紙 | 9/30 | |
| 65 | 辰野登恵子 | May-21-91 | 1300×1960mm | 1991年 | リトグラフ／紙 | 1/30 | |
| 66 | 辰野登恵子 | May-25-91 | 1960×1300mm | 1991年 | リトグラフ／紙 | 8/30 | |
| 217 | 谷川晃一 | カルト・パント | 各89×64mm | 1982年 | オフセット印刷／紙 | 27人の作家たちによるトランプ | |

| | A | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | J | Q | K |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ♠ | 須賀啓 | 平賀敬 | 元永定正 | 谷川晃一 | 村上善男 | 吉野辰海 | 池田満寿夫 | 吉田カツ | 田中信太郎 | 高松次郎 | 宇佐美圭司 | 田名網敬一 | 横尾忠則 |
| ♥ | 中西夏之 | 田中信太郎 | 吉野辰海 | 宮迫千鶴 | 横尾忠則 | 田名網敬一 | 岡本信治郎 | 元永定正 | 須賀啓 | 加納光於 | 谷川晃一 | 池田満寿夫 | 平賀敬 |
| ♣ | 加納光於 | 清水晃 | 村上善男 | 菊畑茂久馬 | 宮迫千鶴 | 中根昭子 | 中村宏 | 赤瀬川原平 | 坪内一忠 | 小島信明 | 野中ユリ | 深沢幸雄 | 岡本信治郎 |
| ♦ | 高松次郎 | 小島信明 | 坪内一忠 | 宇佐美圭司 | 深沢幸雄 | 野中ユリ | 中根昭子 | 清水晃 | 中西夏之 | 菊畑茂久馬 | 吉田カツ | 赤瀬川原平 | 中村宏 |

JOKER　鈴木慶則

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 218 | 谷川晃一 | 「ガソリンオペラ銅版画集」1 | 各143×205mm | 1985年 | エッチング、アクアチント／紙 | E.A. | |
| 219 | 谷川晃一 | 「ガソリンオペラ銅版画集」2 | | | | | |
| 220 | 谷川晃一 | 「ガソリンオペラ銅版画集」3 | | | | | |
| 221 | 谷川晃一 | 「ガソリンオペラ銅版画集」4 | | | | | |
| 222 | 谷川晃一 | 「ガソリンオペラ銅版画集」5 | | | | | |
| 223 | 谷川晃一 | 「ガソリンオペラ銅版画集」6 | | | | | |
| 224 | 谷川晃一 | 森の記憶 Ⅰ | 520×795mm | 1991年 | シルクスクリーン／紙 | 46/80 | ＊ |
| 225 | 谷川晃一 | 森の記憶 Ⅱ | 520×791mm | 1991年 | シルクスクリーン／紙 | 41/80 | ＊ |
| 226 | 谷川晃一 | 森の記憶 Ⅲ | 520×797mm | 1991年 | シルクスクリーン／紙 | P.P. | ＊ |
| 227 | 谷川晃一 | 森の記憶 Ⅳ | 519×796mm | 1991年 | シルクスクリーン／紙 | 43/80 | ＊ |
| 228 | 谷川晃一 | 森の記憶 Ⅴ | 799×525mm | 1991年 | シルクスクリーン／紙 | 44/80 | ＊ |
| 229 | 谷川晃一 | 森の記憶 Ⅵ | 800×525mm | 1991年 | シルクスクリーン／紙 | 43/80 | ＊ |
| 230 | 豊福知徳 | 群像 | 453×355mm | 1960年 | 木（檜） | | |
| 231 | 豊福知徳 | 半円柱 Ⅰ | 高さ2010×幅390×奥行190mm | 1964年 | 木 | | |
| 232 | 豊福知徳 | 母の喪に服す自画像 | 405×325mm | 1987年 | 鉛筆／紙 | | |
| 233 | 中西夏之 | 中央の速い白 Ⅸ | 1620×1940mm | 1990年 | 油彩、木炭／カンヴァス | | |
| 234 | 中林忠良 | 囚われる日々 Ⅵ | 447×562mm | 1974年 | エッチング、アクアチント、ディープエッチング／紙 | 34/40 | |
| 235 | 中林忠良 | 転位92-地-Ⅵ | 620×1515mm | 1992年 | エッチング、アクアチント、ドライポイント／紙 | 19/40 | |
| 236 | 野田哲也 | Diary: March 31st, 1978 | 790×420mm | 1978年 | 木版、シルクスクリーン／紙 | 19/25 | |
| 237<br>238 | ナムジュン・パイク | マクルーハンの肖像 | 452×526mm | 1978年 | シルクスクリーン／紙 | 42/75 | ＊<br>2枚組 |
| 239 | ナムジュン・パイク | TVニュース | 231×290mm | 1984年 | リトグラフ／紙 | 25/75 | ＊ |
| 240 | ナムジュン・パイク | 墓椅子 ボイス | 525×415mm | 1984年 | シルクスクリーン／紙 | 16/60 | ＊ |
| 241 | 浜田浄 | Work 80-A-5 | 665×662mm | 1980年 | シルクスクリーン／紙 | 20/20 | |
| 242 | 浜田浄 | Work 80-A-6 | 660×660mm | 1980年 | シルクスクリーン／紙 | 13/20 | |
| 243 | 浜田浄 | Work 81-12-2 | 511×380mm | 1981年 | シルクスクリーン／紙 | 52/90 | |
| 244 | 浜田浄 | Work 83-2-14 | 576×576mm | 1983年 | シルクスクリーン／紙 | 44/45 | |
| 245 | 浜田浄 | Work 84-2-19 | 500×500mm | 1984年 | シルクスクリーン／紙 | 33/40 | |
| 246 | 浜田知明 | 聖馬 | 208×146mm | 1950年 | エッチング／紙 | 8/10 | |
| 247 | 浜田知明 | 首 | 152×145mm | 1951年 | 銅版／紙 | 45/50 | |
| 248 | 浜田知明 | 疑惑 | 273×178mm | 1957年 | 銅版／紙 | 70/200 | |
| 249 | 浜田知明 | 群盲 | 292×292mm | 1960年 | 銅版／紙 | E.A. | |

＊「森秀貴・京子コレクション」

| 作品番号 | 作家名 | 作品名 | イメージ寸法（縦×横） | 制作年 | 技法／材質 | エディション | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 250 | 浜田知明 | かげ | 235×360mm | 1962年 | 銅版／紙 | 24/50 | |
| 251 | 浜田知明 | 現代の長城 | 364×448mm | 1964年 | エッチング／紙 | 8/20 | |
| 252 | 浜田知明 | アレレ… | 320×191mm | 1974年 | 銅版／紙 | 29/50 | |
| 253 | パブロ・ピカソ | 飛ぶ鳩 | 507×660mm | 1952年 | リトグラフ／紙 | 150/200 | |
| 254 | 彦坂尚嘉 | 反覆と変様 1（森/白） | 320×455mm | 1996年 | シルクスクリーン／紙 | 66/100 | ＊ |
| 255 | 彦坂尚嘉 | 反覆と変様 2（森/黒） | 320×455mm | 1996年 | シルクスクリーン／紙 | 66/100 | ＊ |
| 256 | 彦坂尚嘉 | 反覆と変様 3（室内/茶） | 320×455mm | 1996年 | シルクスクリーン／紙 | 52/100 | ＊ |
| 257 | 彦坂尚嘉 | 反覆と変様 4（室内/青） | 320×455mm | 1996年 | シルクスクリーン／紙 | 59/100 | ＊ |
| 258 | 彦坂尚嘉 | 反覆と変様 5（オープン・マインド/黒） | 320×455mm | 1996年 | シルクスクリーン／紙 | 59/100 | ＊ |
| 259 | 彦坂尚嘉 | 反覆と変様 6（オープン・マインド/虹） | 320×455mm | 1996年 | シルクスクリーン／紙 | 59/100 | ＊ |
| 260 | 彦坂尚嘉 | 反覆と変様 7（ストライプ/グレー） | 320×455mm | 1997年 | シルクスクリーン／紙 | 58/100 | ＊ |
| 261 | 彦坂尚嘉 | 反覆と変様 8（ストライプ/青紫） | 320×455mm | 1997年 | シルクスクリーン／紙 | 65/100 | ＊ |
| 262 | 彦坂尚嘉 | 反覆と変様 9（波/白） | 320×455mm | 1997年 | シルクスクリーン／紙 | 59/100 | ＊ |
| 263 | 彦坂尚嘉 | 反覆と変様 10（波/赤） | 320×455mm | 1997年 | シルクスクリーン／紙 | 57/100 | ＊ |
| 264 | 彦坂尚嘉 | 反覆と変様 11（クリア/青） | 320×455mm | 1997年 | シルクスクリーン／紙 | 54/100 | ＊ |
| 265 | 彦坂尚嘉 | 反覆と変様 12（クリア/白） | 320×455mm | 1997年 | シルクスクリーン／紙 | 55/100 | ＊ |
| 266 | 日和崎尊夫 | KALPA- 海 | 99×107mm | 1968年 | 木口木版／紙 | 35/50 | |
| 267 | 日和崎尊夫 | KALPA- 羊歯 | 100×107mm | 1968年 | 木口木版／紙 | 39/50 | |
| 268 | 日和崎尊夫 | KALPA- 腕 | 95×113mm | 1968年 | 木口木版／紙 | 33/50 | |
| 269 | 日和崎尊夫 | KALPA- 芽 | 100×110mm | 1968年 | 木口木版／紙 | 21/50 | |
| 270 | 日和崎尊夫 | KALPA- 誕生 | 117×105mm | 1971年 | 木口木版／紙 | 41/50 | |
| 271 | 日和崎尊夫 | KALPA- 夜 | 328×275mm | 1972年 | 木口木版／紙 | 28/50 | |
| 272 | 日和崎尊夫 | KALPA-74 | 255×200mm | 1974年 | 木口木版／紙 | E.A. | |
| 273 | 深沢幸雄 | 笑いの底 | 363×300mm | 1961年 | 銅版／紙 | 20/20 | |
| 274 | 深沢幸雄 | 掌の中の影 | 745×483mm | 1976年 | 銅版／紙 | E.A. | |
| 275 | 深沢幸雄 | 異次元よりの使者 | 548×369mm | 1981年 | 銅版／紙 | 45/75 | |
| 276 | 深沢幸雄 | 鏡の前の人 1 | 434×362mm | 1983年 | 銅版／紙 | 20/50 | |
| 277 | 深沢幸雄 | 鏡の前の人 2 | 398×558mm | 1983年 | 銅版／紙 | 29/50 | |
| 278 | 福王寺法林 | 赤富士 | 280×450mm | 制作年不詳 | 紙本彩色 | | |
| 279 | 福王寺法林 | 暁富士 | 530×727mm | 1987年 | 紙本彩色 | | |
| 280 | 福王寺法林 | 風薫る朝 | 892×1156mm | 1998年 | 紙本彩色 | | |
| 281 | 福王寺法林 | ヒマラヤの朝 | 409×530mm | 2004年 | 紙本彩色 | | |

※No.1-58, 67-216 は後期（2023年7月15日-8月20日）展示

## 作家解説

### 高山良策　TAKAYAMA Ryosaku

1917（大正 6）-1982（昭和57）年

山梨県南都留郡西桂町に生まれる。西桂尋常高等小学校（現・西桂小学校）を卒業後、上京し製本店に勤務しながら絵画を独学で学ぶ。1938年召集を受け、軍需品の輸送担当兵士として派遣される。召集解除後、後の東京田辺製薬株式会社図案部にてデザインを担当し、1943年からは東宝航空教育資料製作所で軍事教育映画のセットを作りながら、日本クロッキー研究所および福沢一郎絵画研究所で学ぶ。シュルレアリスムの影響を受け、美術家として歩み始める。1951年東宝から独立し、作品制作の傍ら円谷プロダクションをはじめとしたアニメや特撮用怪獣、舞台美術などの製作に携わる。70年代に入り怪獣ブームに次第に陰りが見えるようになると、仕事に忙殺されていた高山は怪獣製作をセーブし、再び自身の作品制作に専念するようになる。晩年は現実と神話的な世界を混在させたような作品を描く。1982年、死去。享年65歳。

### 辰野登恵子　TATSUNO Toeko

1950（昭和25）-2014（平成26）年

長野県岡谷市に生まれる。1968年東京藝術大学美術学部油画専攻に入学。1974年同大学院美術研究科油画専攻修了。アンディ・ウォーホルやロバート・ラウシェンバーグから影響を受けて、写真製版によるシルクスクリーンの制作を開始する。同学年で意気投合した写真家・柴田敏雄と版画家・鎌谷伸一とともに空き教室の一角に写真製版のための版画工房を作り、制作に没頭する。1971年と73年には村松画廊にてグループ展を開催する。その後、版画制作と絵画制作を往還しながら活動する。史上最年少で1995年東京国立近代美術館にて「辰野登恵子 1986-1995」が開催され、翌年には第46回芸術選奨文部大臣新人賞を受賞する。2004年多摩美術大学教授に就任。2012年国立新美術館「与えられた形象 辰野登恵子 柴田敏雄」が開催される。2013年毎日芸術賞を受賞。2014年、死去。享年64歳。

## 谷川晃一　TANIKAWA Koichi

1938（昭和13）年-

東京市日本橋区（現・東京都中央区）に生まれる。1956年攻玉社高等学校卒業後、料理人見習いをはじめとする様々な仕事に就きながら独学で画家を目指す。1958年「第22回自由美術家協会展」に出品。1963年「第15回読売アンデパンダン展」に出品し、赤瀬川原平や中西夏之ら同世代の作家たちとの交流を深める。1964年内科画廊にて初個展を開催。同年、ハイレッド・センターによる「首都圏清掃整理促進運動」に参加する。1965年の第9回シェル美術賞に佳作で入選する。1968年土方巽舞踏公演「土方巽と日本人肉体の叛乱」の美術スタッフを中西夏之、清水晃とともに務める。1988年に伊豆高原に移住し、1993年には住民自らが楽しむための文化祭として「伊豆高原アートフェスティバル」を立ち上げる。絵本などの著作や美術評論も多く、暮らしの中のアートの魅力を広く発信している。

## 豊福知徳　TOYOFUKU Tomonori

1925（大正14）-2019（令和元）年

福岡県三井郡（現・久留米市）に生まれる。1942年に上京し、國學院大學国文科予科に入学し、その後本科にすすむ。在学中に学徒出陣で特別攻撃隊を志願する。敗戦後、帰郷し伝統的木彫を受け継ぐ冨永朝堂に師事する。1952年三鷹市牟礼（現・井の頭）にアトリエを構える。1955年「第19回新制作協会展」で新作家賞受賞。1959年《漂流'58》が第2回高村光太郎賞を受賞する。1960年「第30回ヴェネチア・ビエンナーレ」に選出され、《漂流'58》を含めた3作品を出品する。同年、初個展を東京画廊で開催。個展終了後、ヴェネチア・ビエンナーレに行ったところ現地での個展開催が決定し、ミラノにアトリエを構える。欧州と日本を中心として活動する。1990年毎日芸術賞受賞。1993年紫綬褒章、2001年勲四等旭日小綬章を受章。2003年、43年にわたるミラノ滞在を終えて日本に帰国し、その後は福岡市に居住する。2019年、死去。享年94歳。

## 中西夏之　NAKANISHI Natsuyuki

1935（昭和10）-2016（平成28）年

東京市品川区（現・東京都品川区）生まれ。1958年東京藝術大学美術学部油画専攻卒業。1962年より「山手線事件」をはじめとした「ハプニング」を展開する。1963年初めて参加した「第15回読売アンデパンダン展」に7枚のカンヴァスから出た無数の紙紐にアルミ製の洗濯バサミを付けた《洗濯バサミは攪拌行動を主張する》を出品する。赤瀬川原平、高松次郎とハイレッド・センターを結成。1965年土方巽と知り合い、暗黒舞踏の舞台美術などを共同で制作する。舞台領域との関わりが空間と身体、そして絵画との関係性への思索を深める契機となる。1968年美学校の設立に関わる。1996年東京藝術大学美術学部絵画科教授、2007年女子美術大学大学院客員教授に就任。東京藝術大学名誉教授。2016年、死去。享年81歳。

## 中林忠良　NAKABAYASHI Tadayoshi

1937（昭和12）年-

東京市品川区（現・東京都品川区）生まれ。高校卒業後、1956-57年株式会社ベースボール・マガジン社へ勤務する。1958年美術研究所に通う傍ら、東光会の森田茂に師事する。1959年東京藝術大学美術学部油画専攻入学。後に版画研究室「アトリエ C-126」をともに結成する野田哲也と同級となる。版画家・駒井哲郎の集中講義で銅版画と出合い版画の道へと進む。1963年東京藝術大学卒業後、同大学院版画専攻に入学し駒井哲郎に師事する。1965年東京藝術大学大学院修了、同大学美術学部副手に採用される。1975-76年文部省派遣在外研修員としてパリ国立美術学校、ハンブルク造形芸術大学にて研修を受ける。1986年「第11回クラクフ国際版画ビエンナーレ」で優秀賞を受賞。2013年紫綬褒章、2014年瑞宝中綬章を受章。数多くの大学にて教鞭をとる。東京藝術大学名誉教授、版画学会名誉会員。

## 野田哲也　NODA Tetsuya

1940（昭和15）年-

熊本県宇土郡不知火町（現・宇城市）に生まれる。1959年東京藝術大学美術学部油画専攻に入学。1965年同大学院美術研究科油画専攻修了。在学中に小野忠重より木版画を学ぶ。1968年から自分自身の日常の風景を、写真を使ったシルクスクリーンに木版を組み合わせて版画化した〈日記〉シリーズの制作を開始する。同年「第6回東京国際版画ビエンナーレ」にて《日記1968年8月22日》が国際大賞受賞。1977年「第12回リュブリアナ国際版画ビエンナーレ」でグランプリを受賞する。1991年東京藝術大学美術学部教授に就任。2003 年紫綬褒章受章。2006-07年CCGA現代グラフィックアートセンターほか「野田哲也：日記」が開催される。

## ナムジュン・パイク　Nam June Paik

1932（昭和７）- 2006（平成18）年

旧・朝鮮の日本統治下の京城（現・大韓民国ソウル市）に生まれる。1950年来日。1956年東京大学美学美術史学科を卒業。ドイツに渡り前衛音楽を学び、ジョン・ケージとヨーゼフ・ボイスと親交を深める。1959年にオーディオテープとパフォーマンスを使った《ジョン・ケージに捧ぐ》を発表する。1962年フルクサスのイベントに参加。1963年パルナス画廊での初個展「音楽の展覧会－エレクトロニック・テレビジョン」で、世界初のビデオアート作品を発表。1965年ビデオカメラを使用した映像作品《ローマ法王パウロ6世のニューヨーク訪問》を発表する。1979-96年の間、デュッセルドルフ美術アカデミーで教鞭をとる。1993年「第45回ヴェネチア・ビエンナーレ」でドイツ館をハンス・ハーケとともに代表し、パビリオン賞を受賞する。2006年、死去。享年73歳。

## 浜田浄　HAMADA Kiyoshi

1937（昭和12）年-

高知県幡多郡大方町（現・黒潮町）生まれ。1956年多摩美術大学絵画科油画専攻に入学する。在学中の1959年「第９回モダンアート協会展」で初入選する。1962年都内中学校の非常勤講師として勤務。1965年に図工専科の教員として豊島区立平和小学校（現・豊島区立要小学校）に着任し、その後転任を重ねながら1996年に退職する。1964年おぎくぼ画廊にて初の個展を開催。1977年から版画制作に取り組み、同年の「第2回現代版画コンクール」にて佳作賞を受賞。版画の制作過程ついて疑問を持つようになり、80年代からは紙を鉛筆で塗りつぶす〈DRAWING〉シリーズの制作を開始する。油彩作品の制作も継続しながら現在も精力的な活動を展開している。

## 浜田知明　HAMADA Chimei

1917（大正6）- 2018（平成30）年　　本名：高田 知明（たかた ともあき）

熊本県上益城郡高木村（現・御船町）に生まれる。1930年に入学した熊本県立御船中学校（現・熊本県立御船高等学校）を4年で修了し、東京美術学校（現・東京藝術大学）油画科に入学する。卒業後召集、中国大陸に派遣される。1945年復員し、教師を務めながら銅版画の研究を開始する。戦争体験を訴える〈初年兵哀歌〉シリーズの発表を始める。1956年「第4回ルガーノ白と黒国際展」で《初年兵哀歌（歩哨）》が次賞を受賞。フィレンツェ美術アカデミー版画部名誉会員となる。1967年より熊本短期大学（現・熊本学園大学）で教鞭をとり、退職後も客員教授を務める。1989年フランス政府からレジオン・ドヌール勲章シュヴァリエを受章。2008年日本人初となるウフィッツィ美術館での個展を開催。過酷な戦争体験から見た社会や人間の根源を表現した作品は高い評価を受ける。2018年、死去。享年100歳。

## パブロ・ピカソ　Pablo Picasso

1881（明治14）- 1973（昭和48）

スペイン南部のマラガで生まれる。画家でバルセロナの美術学校の教授でもあった父のもとで幼い頃から画才を発揮する。1900年に初めてパリを訪れ、ロートレックや後期印象派の影響を受ける。その後はスペインとパリを往来する。1901年に親友の死を契機に「青の時代」が始まる。1904年モンマルトルのアトリエに移る。1907年《アヴィニョンの娘たち》を制作。その後、ジョルジュ・ブラックと対象を幾何学的な形態によってとらえるキュビスムの探求を始める。第一次世界大戦後は、新古典主義やシュルレアリスムからの影響を受ける。1937年にスペインの村ゲルニカがナチスによる爆撃を受けたことへの抗議の意を込めた《ゲルニカ》を制作。70歳を過ぎてからベラスケスなど過去の巨匠たちの作品を再解釈した連作に取り組むほか、版画、彫刻、陶芸など幅広い制作活動を展開する。1973年、死去。享年91歳。

## 彦坂尚嘉　HIKOSAKA Naoyoshi

1946（昭和21）年-

東京都世田谷区に生まれる。1967年多摩美術大学絵画科に入学（1970年除籍）。1969年学園紛争の中、堀浩哉、石内都、宮本隆司らと美術家共闘会議（美共闘）の結成に加わる。1970年から自室の床に撒いた工業用ゴムが時間の経過とともに変化していく様子を撮影する《フロア・イベント》を開始する。70年代以降、コンセプチュアル・アートの先達として芸術とは何かを問い続けている。1982-83年文化庁派遣芸術家在外研修員としてアメリカのペンシルバニア大学大学院へ留学。1982年「第40回ヴェネチア・ビエンナーレ」、1999年クイーンズ美術館ほか*Global Conceptualism: Points of Origin, 1950s -1980s*、2001年テート・モダン *Century City*、2015年東京国立近代美術館「Re: play 1972/2015－「映像表現'72」展、再演」へ出品。2009-13年立教大学大学院の特任教授を務める。主な著書に『反復 新興芸術の位相』(アルファベータブックス)、『彦坂尚嘉のエクリチュール－日本現代美術家の思考』(三和書籍)がある。

## 日和崎尊夫　HIWASAKI Takao

1941（昭和16）- 1992（平成４）年

高知県高知市生まれ。1959年武蔵野美術学校（現・武蔵野美術大学）第二本科西洋画専攻（夜間部）に入学。卒業後、1963年創作版画の草分け的存在であった畦地梅太郎に師事する。在学中から郷里の展覧会にも参加する。1964年帰郷。この頃、恩地孝四郎著『日本の現代版画』（創元社）などから木口木版に関心を持ち、制作を開始。「日本版画協会展」で1966年（第34回）に新人賞、翌年（第35回）に日本版画協会賞を受賞する。1968年ごろ法華経の「カルパ KALPA」の思想に魅せられ〈KALPA〉シリーズの制作を開始する。1970年「第2回フィレンツェ国際版画ビエンナーレ」で金賞を受賞。1974-75年文化庁派遣芸術家在外研修員としてヨーロッパに滞在。1977年木口木版画の普及のために鑿(のみ)の会を結成する。晩年は後進の育成のために高知版画協会を結成し、1990年「第1回高知国際版画トリエンナーレ」を開催する。1992年、死去。享年50歳。

## 深沢幸雄　FUKAZAWA Yukio

1924（大正13）- 2017（平成29）年

山梨県南巨摩郡増穂町（現・富士川町）生まれ。生後すぐに旧・朝鮮堤川（現・大韓民国忠清北道堤川市）に移る。1942年東京美術学校（現・東京藝術大学）工芸科彫金部予科へ入学する。1945年4月に軍へ入隊し、終戦とともに帰郷。卒業後、千葉県市原郡鶴舞町（現・市原市）に移住し、当地で美術教師を務める。1951年に結核性関節炎を発症し油彩画の制作が困難となったため、銅版画の制作を独学で開始。1962年「第5回現代日本美術展」で優秀賞を受賞したことを契機にメキシコより招聘され、3か月滞在する。その後メキシコに影響を受けた〈新大陸のモンゴロイド〉シリーズを発表。1986年から多摩美術大学教授に就任。1990年メキシコ国立版画美術館で「日本の版画深沢幸雄展」が開催される。1994年メキシコ国文化勲章アギラ・アステカ、1987年紫綬褒章、1995年勲四等旭日小綬章を受章。多摩美術大学名誉教授。2017年、死去。享年92歳。

## 福王寺法林　FUKUOJI Horin

1920（大正 9）- 2012（平成24）年　　本名：福王寺雄一

山形県米沢市生まれ。6歳の時、父親と狩猟に行った時の事故によって左目を失明する。1928年から米沢在住の日本画家・上村廣成に師事する。1936年に画家を志し、上京。1941年に召集を受け中国戦線に配属される。1946年の復員後は郷里へと戻り、作品制作を開始する。1949年「再興第34回日本美術院展覧会」（以下、院展）に《山村風景》を出品し、初入選する。また同郷の美術評論家・今泉篤男と出会い、指導を受ける。1953年三鷹市へ転居。1974年ヒマラヤへ取材に行き、「第59回院展」に《ヒマラヤ》を出品する。以後、幾度も同地を訪れヒマラヤを題材とした連作を発表し続ける。1991年日本美術院理事に選任される。1994年日本芸術院会員となる。1997年勲三等瑞宝章、2004年文化勲章を受章。2005年三鷹市美術ギャラリー「三鷹市名誉市民章受章記念展」が開催される。2012年、死去。享年91歳。